

RESAS を活用した政策立案ワークショップ（茨城県古河市）

第 2 回 概要

令和 8 年 3 月

内閣官房 地域未来戦略本部事務局

内閣府 地方創生推進室

経済産業省関東経済産業局

茨城県古河市にて、産業政策や企画に関わる職員を中心に、「地域経済分析システム（RESAS）」を活用した政策立案ワークショップを下記のとおり開催しました。有識者の協力を得て、「古河市を稼げる地域へ」を題材にしたワークショップの第 2 回目（全 2 回）を令和 8 年 3 月 24 日に開催しました。古河市の今後の産業ビジョン策定に向けて、第 1 回で出た課題を踏まえ、商工業・農業・観光の 3 テーマの取組の方向性と、その議論を踏まえた産業ビジョン全体の方向性を整理・議論しました。

記

1 テーマ：「古河市産業ビジョン策定ワークショップ ～古河市を稼げる地域へ～」

2 日 時：令和 8 年 3 月 24 日（火）14 時～16 時

3 会 場：山水はなももプラザ（古河市地域交流センター）

4 主 催：茨城県古河市

内閣官房 地域未来戦略本部事務局

内閣府 地方創生推進室

経済産業省関東経済産業局

5 参加者：

- ・古河市職員
- ・古河商工会議所職員
- ・古河市商工会職員
- ・一般社団法人古河市観光協会職員
- ・JA 茨城むつみ職員
- ・EY ストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社シニアマネージャー 大村 浩之氏
- ・内閣官房地域未来戦略本部事務局／内閣府地方創生推進室職員
- ・経済産業省関東経済産業局地域経済部職員
- ・経済産業省九州経済産業局地域経済部職員

6 議事次第

- ① 第1回ワークショップの振り返りと今後の古河市の産業政策について
- ② 意見交換
- ③ 有識者によるまとめ
- ④ フィードバック

(1) 古河市長挨拶

- ・古河市は都心からのアクセスが良く、商業・工業・農業が盛んな地域である一方、高齢化による人口減少の進行や市民ニーズの多様化などの課題に直面していることを踏まえ、令和8年度に古河市の商業・工業・農業・観光を取り巻く『古河市産業ビジョン』を策定したいと考えている。本ワークショップの成果を産業ビジョン策定の基礎とし、第1回目のワークショップを踏まえ、より実現性の高い取組の検討と産業全体の方向性について有意義な意見交換を行っていただき、産業の育成へ繋がることを期待する。

(2) 古河市による第1回ワークショップの振り返りと今後の産業政策について

- ・第2回の進め方として、①第1回ワークショップの振り返り(定量データの復習・定性情報の整理・取組の方向性)と、②今後の古河市の産業政策の二部構成で進める。第1回はRESASおよび各種統計情報の現状分析をもとに議論し、商工業・農業・観光および横断的課題について意見交換をした。第2回は、商工業・農業・観光の3テーマの取組の方向性と、その議論を踏まえた産業ビジョン全体の方向性を整理することを目指す。
- ・人口動態について、2023年の転入が4,733人、転出が5,052人、319人の転出超過で、転入・転出ともに近隣市町村が多い状況。近年の人口減少は自然減が主因である一方、社会増減の改善が人口減少を一定程度緩和している。合計特殊出生率は全国平均と同程度で推移しているが、人口維持に必要な水準には届いていない。総人口推計では、出生率と移動率の前提により将来人口の減少幅が大きく変動する。自然増減が社会増減よりも人口減少に大きな影響を与えているが、対策には限界があるため若者や生産年齢世代の社会増を増やす対策が必要。
- ・地域経済循環について、循環率は概ね100%近傍だがやや下回り、域外要因(通勤や交付金等)への依存が示唆される。また、付加価値額は第一次産業68億円、第二次産業3,158億円、第三次産業3,164億円と、1人当たりでは第二次産業が高い水準となっている。分配面では雇用者所得の309億円の域外流入とその他所得の295億円の域外流出が見られ、

支出面では民間消費の 824 億円の域外流出が大きく、域外への流出が流入(民間投資・その他支出)を 14 億円上回っている。

- ・観光について、滞留人口分析から古河駅周辺と道の駅周辺を抽出。駅周辺は 17 時～23 時に滞留人口が増え、道の駅は 9 時から 17 時に集中している。宿泊は 1 泊が中心で、短期滞在者が多く、滞在コンテンツ不足や回遊・消費の広がりが限定的といった課題が見える。
- ・商工業について、従業者数は製造業が約 8,800 人、卸売・小売業が約 5,600 人、医療・福祉が約 5,000 人で、全体の約 56%を構成している。事業者数では卸売・小売業、建設業、製造業等が多く、製造業は従業者数の割に事業者数が少ないため、比較的大規模な事業所が多いと考えられる。修正特化係数では輸送用機械が 9.96 と最も高く、地域外へ稼ぎ出す力が相対的に強い産業である。影響力・感応度分析でも、輸送用機械が地域内取引の核となり得る産業として位置づき、情報通信業、鉄鋼、化学、食料品なども次点の可能性があり、第二・第三の地域の核となる産業の育成・誘致が必要。
- ・農業について、2015 年から 2020 年にかけて農業経営体数が約 381 減少している一方で、団体経営体は 7 増加傾向となっている。農業者の平均年齢は古河市だけでなく県及び全国的に上昇し、高齢化が進行しており、高齢化による労働力の低下・後継者不足が課題となる。作付面積は水稻に加え、キャベツ、レタス等の葉物野菜が中心。
- ・第 1 回ワークショップでは RESAS 等の定量分析の結果に対する意見に加え、定性情報に関する意見交換を実施。定量データは数値で比較・検討でき、マクロな結果を得られる一方、数値で表せないニーズ・原因・背景を捉えにくい点がある。そのため、数値に表れないニーズや原因を探るために、今回、定量データと定性情報を合わせて考察することで、より実情に即した企画につなげる方針とした。
- ・第 1 回で得られた定性意見(現場の声)を、①域外需要の獲得、②地域内循環の強化、③稼ぐ力の向上、④推進基盤の整備の 4 区分×現状・課題・取組の方向性で整理。実現したい姿である「稼げる古河市」になるためには地域経済を最大化していく必要がある。そのプロセスとして、域外需要を獲得し、外貨や人を域外から継続的に獲得する仕掛けをつくる。外貨が得られるようになれば、地域内循環の強化として域内調達と再投資でお金の流出を抑制し、関係交流人口の回遊性を高め、ヒト・カネを地域内でまわす。そして、稼いだお金を使用して生産性の向上、高付加価値化、市場・販路開拓を行い投資することで、地域経済を最大化していく流れとなる。また、推進基盤の整備で、人材の確保・育成、事業継承、交通アクセス等を強化し、体制を支えていく。
- ・観光分野は継続的な導線設計・施設や観光コンテンツ不足・地域資源の磨き上げ、商工

業分野は市外での消費・駅西口周辺のシャッター店舗の多さ・製造業のポテンシャルの高さ、農業分野は限定的な付加価値・地元産品の域外中心とした流通・担い手の育成・第三者承継の仕組みと整備など、約 240 件の意見が集まった。

- ・定量情報・定性情報を統合し、『①”回って楽しい古河”のルートづくり』『②”古河産をいつでも買える”仕組みづくり』『③”晩も来たくなる・滞在したくなる古河”のはじめ方』『④”古河らしさを手に取る”土産と体験』『⑤”行きたくなる場所”をつくる古河の中心づくり』『⑥”継ぐ人・動かす人”を増やす仕組み』の 6 つの観点で整理。
- ・『①回って楽しい古河のルートづくり』では、現状・課題として、「ミュージアムや遊水地に飲食・物販がなく、回遊が起きにくい」「導線の連続性や PR が弱く、立ち寄りが続かない」「市民も週末は市外で消費する傾向がある」といった意見が挙がっており、「古河の最小回遊ルートをどう構成するか」がポイントになる。取組の方向性の選択肢として、導線の強化・移動×体験を整える・通年で動くコンテンツを増やすことが考えられる。
- ・『②古河産品をいつでも買える仕組みづくり』では、現状・課題として、「道の駅以外で古河産品を買える場所が少ない」「市場出荷依存で市内流通が弱い」「地産地消の取組が不足」「商工・農業・観光の連携が不足」といった意見が挙がっており、「市内販売チャネル(購入機会)をどう増やすか」がポイントになる。選択肢として、駅前直売所を作る・スーパーの棚を拡充する・既存売場を束ねることが考えられる。
- ・『③晩も来たくなる古河のはじめ方』では、現状・課題として「日帰り・低単価が中心」「宿泊はビジネス用途が多い」「夜の仕掛けが不足」「花火以外の夜の魅力が乏しい」といった意見が挙がっており、「夜の核となる施策を何にするか」がポイントになる。選択肢として、花火大会の観覧エリアを”夜の目玉”にするといったブランド強化・歴史×夜景で魅せる・サウナを夜の体験にすることが考えられる。
- ・『④古河らしさを手に取る土産と体験』では、現状・課題として、「定番の土産が弱い」「耐熱ガラス製品はふるさと納税では市外でも人気がある一方で、商品開発や体験が弱い」といった意見が挙がっており、「【商品×体験×売り場】をどう組み合わせるか」がポイントになる。選択肢として、オリジナルの商品をつくる・体験とセットにする・売り場を整えることが考えられる。
- ・『⑤行きたくなる場所をつくる古河の中心づくり』では、現状・課題として「来訪理由となる中心拠点が弱い」「空き店舗が増加」「週末は市外で消費する」「イベントと店舗の連動が弱く滞在が伸びない」といった意見が挙がっており、「中心(核)をどうつくるか」が

ポイントになる。選択肢として、“核”を置く・空き店舗から“面”をつくる・イベントと街を連携することが考えられる。

- ・『⑥継ぐ人・動かす人を増やす仕組み』では、現状・課題として「事業承継が表面化せず相談が出ない」「若手運営人材が不足」「農業は高齢化」「第三者承継が必要」といった意見が挙がっており、「承継・運営者確保の仕組みづくり」がポイントになる。選択肢として、相談の入口と周知を強化する・第三者承継を体系化する・運営者を発掘・確保することが考えられる。
- ・各テーマの方向性を束ね、産業全体の方向性として『めぐる・とどまる・つながる古河』を提案。「めぐる」は駅前から旧町エリアへ回遊ルートをつなぎ、買える場所を増やすこと、「とどまる」は夜のライトアップや企画で泊まれる理由をつくり中心拠点を育てること、「つながる」は次の担い手へ受け継ぐことを意味する。これを柱とし、①市内循環の可視化(回遊ルートと買える場所の恒常化)、②来訪理由の強化×滞在化(夜体験・中心拠点等)、③担い手確保と承継の見える化(実装を止めない仕組み化)、の3点で整理した。
- ・古河市は都心からのアクセスが良好で、商業・工業・農業が盛んな地域。
- ・工業分野では複数の工業団地があり、輸送用機械を筆頭に製造業が盛んで製造品出荷額は全国上位。
- ・交通の利便性が高く地域外から人が集まりやすい一方、市民の消費が市外へ流出する傾向。
- ・商店街・農業分野では高齢化が進み、経営環境が厳しい。
- ・過去総合計画に基づき産業の各分野で政策を実施してきたが、産業全体の方向性を示す計画はなかった。
- ・令和8年度に、現行計画やワークショップで得られる現状・課題・方向性を基に「古河市産業ビジョン」を策定予定。
- ・商業・工業・農業・観光の活性化を図り、市民や来訪者が増える魅力的な取組を推進。
- ・ビジョン策定過程で市民・事業者・関係機関と現状・課題・方向性を共有し、まちの活力と賑わい創出に貢献。
- ・今年度の成果を令和8年度に広く共有し、多様な意見を反映した実践的なビジョン策定を目指す。

(3) 意見交換（6つの観点）

- ・【観点①】回遊を設計するうえで『誰をターゲットにするのか』が資料から読み取りにくい。道の駅とミュージアムに来訪する方の年齢層や目的が異なる可能性があり、スポットの来訪目的・属性を踏まえて回遊パターンを設計すべき。また、古河はポテンシャルやプレミアムがあるが、PRが不足している。[古河市観光物産課]
- ・【観点①】道の駅～駅前の移動手段は市内循環バスしかなく、回遊の前提として交通手段が不足している。RESAS データより道の駅は午前がピークで約 3,000 人程度、駅周辺は夕方以降に 1 万数千人規模の滞留があるため、駅を起点に徒歩圏内で導線として見せるほうが効果的ではないか。[古河市産業戦略課]
- ・【観点①】道の駅は年間 100 万人以上の集客があるため、これをどう回遊につなげていくかも重要。[古河市産業部長]
- ・【観点①】必ずしも無理に『つなぐ』のではなく、各拠点を深掘りして『長く滞在してもらう』考え方もある。[古河市 副市長]
- ・【観点②】『買える』だけでは価値が届くのか疑問。買ったあとに消費者が『食べる』ところまでの仕組みづくりが本当の価値を届けると考える。また、『滞在する』にも繋がり、例えば BBQ やグランピング等も含め、横断的に価値を届けられる可能性がある。[JA 茨城むつみ]
- ・【観点②】購買機会を増やすなら、店舗だけでなくネット販売や市内企業への出張販売で知ってもらうのも一つ。古河市の特産品である「薔薇」を欲しい女性が多いが、どこで購入できるか分からない。例えば、金融機関などへ昼休みに出張販売することも良いと考える。[古河市 副市長]
- ・【観点②】RESAS の統計データだけでは他都市と同様の課題が出やすい。全国の地方都市で同じ結果になりがち。何をテーマにするか、ブランドを構築して統一した発信を繰り返し、リピートで興味が湧く仕掛けを作ることが重要。[古河商工会議所]
- ・【観点③】夏の花火大会に加え、冬季等の夜の目玉づくりとして『歴史×夜景』の組み合わせは良い提案だと思う。土手からの景観の良さから、土手と歴史ミュージアムの近い距離をつなぎ、東京から来る方は 1 日滞在しても帰ってしまうことも多いので、夜に絞って滞在理由を作る視点が必要。[古河市観光物産課]
- ・【観点③】季節限定のライトアップ等は来訪動機になり得るが、日常的にリピートしてもらうのは難しい。来てもらった上で見せるコンテンツは別途練らないと人は呼べない。[古河市産業戦略課]

- ・【観点③】夜の滞在を促すには、行列ができる店など『並んでも行きたい』目的地づくりや、夜に滞在するなら宿泊施設など受け皿の整備も必要な観点である。[古河市副市長]
- ・【観点④】古河市には日本で唯一の篆刻専門の美術館があり、オンリーワンで武器になる一方、教えられる人材が限られ、一度に大勢を受け入れにくく、商業的な展開では苦労した経験もある。それでも、どこかに行って何かを作り、自分だけのものを持ち帰る体験は魅力があり、また行きたいに繋がるため、こうした戦力の発掘は進めたい。[古河市産業戦略課]
- ・【観点④】ネットで土産が買える時代だからこそ、現地でしか味わえない『食』を組み込むことが価値になる。[古河市産業部長]
- ・【観点④】耐熱ガラス製品の工場見学は規制で難しい面があるが、その希少性を『プレミアム』として呼び込みに活用できる。例えば自分が注文したアクセサリーの製造工程を見学するなど、体験ではなく見学型のコンテンツも作れる可能性がある。[古河市観光物産課]
- ・【観点④】銘柄産地として、人参・にがうり・サニーレタスなどがある。売るだけでなく、オリジナル商品として加工・販売する商品開発を進めれば、ブランド力を高め、価格決定力・付加価値向上に繋がる。[古河市農政課]
- ・【観点④】三和地区では、保育園や幼稚園の生徒向けに人参や玉ねぎの収穫体験を毎年実施している。外部に広げたい思いはあるが、野菜は気候で収穫時期が読めず、前もって予定を組むのが難しいのが現状。[JA 茨城むつみ]
- ・【観点④】「買う理由・来る理由」を結びつけると、期間限定や女性ターゲットも戦略になる。にがうりの栄養価やガラス製品などは女性に好まれるため、そうした魅力を見せながらターゲットを絞る方法もある。[古河市 副市長]
- ・【観点④】輸送用機器の稼ぐ力が高いのは大企業が引っ張っている面もあるが、下請け・サプライヤーの中小企業も点在している。大企業だけでなく地場の町工場も含めたオープンファクトリーを街ぐるみで行うことで、工業の街としての価値を打ち出せるのではないか。[古河商工会議所]
- ・【観点⑤】商業の成立には人が集まる場所づくりが不可欠。産業戦略課でも地域の商業振興を目指し、様々な取り組みを行っている。その取り組みの一つとして、関東経済産業局からの紹介された方と協力し、空き店舗・空き家を防災拠点として活用し、DIYしながら整備する過程に人が集まる場を作り、周辺に商業が成立する流れができればいいと考えている。[古河市産業戦略課]

- ・【観点⑥】農業に触れる機会は意外と少ないが、世代を超えて一緒にできる体験として農業は相性がよい。家族で収穫する、箱詰めする、出荷して売れるまでの流れを体験できれば、回遊にも盛り込めると思う。[JA 茨城むつみ]
- ・【観点⑥】事業承継は表面化しにくく掘り起こしに苦慮している。相談の入口をどう広げるか、相談が来た時に各機関が連携し、第三者承継やマッチングにどう繋いでいくか、仕組みづくりが必要。[古河商工会議所]
- ・【観点⑥】事業承継の相談は近年少しずつ増えてきている。こちらから踏み込み過ぎないように掘り起こしを念頭に進めたい。[古河市商工会]
- ・【観点⑥】農業者の平均年齢は 64 歳と統計上高く見えるが、三和地区周辺は 40～50 代が中心である。農協では退職職員がアドバイザーとして巡回し、承継のアドバイスを行っている。[JA 茨城むつみ]
- ・【観点⑥】承継の相談窓口を分かりやすく見える化する必要がある。また、農業を志す若者が増えており、市外へ向けた呼び込みも強化したい。[古河市 副市長]

(4) 産業の方向性・有識者によるまとめ

- ・6 観点の議論を踏まえ、①ターゲット設定と提供価値の明確化(誰に何を届けるのかを深掘りする)、体験の多様化(買う・食べる・作る・見学・滞在等)、認知のきっかけづくりとブランド設計、②実行可能な導線の整理(交通手段も含めてどう周遊・滞在してもらうか)、③担い手・承継の仕組みの見える化が、産業の方向性の三つの柱となる。[有識者大村氏]
- ・商工業では中小企業を伸ばし、大企業とコラボ・マッチングしていくことでさらに大きな価値が生まれる。商工業・農業・観光のそれぞれの強みを掛け合わせることが重要であり、製造業の中で付加価値額が高い輸送用機械の強みをどう伸ばし、恩恵をどう波及させるかが観点になる。[古河市 副市長]
- ・本日のキーワードとして「深掘る」「体験する」がはまっている一方で、産業全体の方向性である「めぐる」「とどまる」とどう整理されるのか。小規模な巡回が深掘りに見える場合、「めぐる」という言葉が当てはまりに迷いがある。[古河市産業戦略課]
- ・今後は『誰に何を届けるか』を大前提に、考えるポイントを増やすよりも深めて具体化していくこと、どのような形で価値として市民・来訪者に届けていくのか、が産業ビジョンを考えていく上でのポイントになる。今回のワークショップの位置付けはビジョンを考えていく上での骨子づくりで、来年度以降は具体的にどのような取組が必要になってくるかをしっかりと考えていくことが重要となる。[有識者大村氏]

(５) 本日の振り返り(古河市 副市長)

- ・古河市は商工業・農業・観光それぞれに強みがあり、データからもはっきり見えている。
 今後はその強みをどう掛け合わせるかで地域内循環が強化されると思う。これを基に産業ビジョンを策定し、「稼ぐ古河市」を目指していきたい。

(６) 総評(古河市長)

- ・様々な立場から多様な意見、具体的な提案が繰り広げられ、有意義な議論が展開されることで共通認識が一定程度出来たと感じている。分野横断の連携という視点も受け止め、産業ビジョンに反映し、強い経済の実現に貢献していきたい。本ワークショップが古河市の産業の未来を引き継ぐ重要な一歩であること、関係機関の皆様と市の連携を一層深める貴重な機会となったことに御礼申し上げるとともに、今後も引き続きご支援・ご協力を願う。

以上